

## 生活を軸とした芸術・保育活動

—米国モンテッソーリ・アートプログラムの実践報告—

近江 綾乃

はじめに

昨年ニューヨークから日本に戻り、約三〇年ぶりに、改めて芸術教育を日本の現場で見えていくことになった。日本のバブル時代に渡航したため、日本のゆとり教育時代、小学校一―二年の生活科の導入期を体験することがなかった。日本の教育改革の動きに興味を持って帰国した。

京都、大阪、名古屋にある保育所、幼稚園、児童館、小学校の教員と面会や訪問の機会には、美術・造形教育に対する疑問や迷いの交換が欠かせない。「造形にどう取り組んだらいいのか」「素材探しの悩みがつきまとう」「図工教師としての自信がない」「様々なあそびをとり入れるが、どんな指導案を、どう工夫すべきか」など尽きることがない。時には教員の教育観、指導法が固定しているのに驚くこともある。子どもの気づきを促すはずの教室で、その逆が行われているのを見た。同じカタツムリの絵がずらりと並ぶ幼稚園の年長組教室の壁、業者による袋詰めセット教材が個々に配られる一年生の図工の授業。これでは各自の個性、感性は伸びていかないであろう。

昨年の夏、堺市の小学校より美術教育に携わる教員方がこども芸術学科を訪ねられ、美術授業の現場の実態を発表された。「自分の思いを表現するために必要なスキル」や、「素材や道具の扱い」をどう指導していくか、児童の絵の見方、評価が難しい、ほめていいのか、教材選択は、という質疑応答を交わした。グループディスカッションでは、「保護者からの目があるのか、壁に掲示する作品は、綺麗で上手なものに、というプレッシャーがある」という発言が出た。小学校の美術教育にある教員側と父兄側の期待や価値観、また授業の目的・目標設定に問題を感じた。

歴史的社会的推移の中で、日本の教育は「技術養成」という意識が継承され、現在の図画工作（美術）の教科認識に波及した。それは、「目的目標の再確認作業が不可欠であることを主張した由縁である」と若元澄男氏は言明し、また、教員側に「作品」と呼ばれる「有形の成果」のこだわりが先を行ってしまった現状があった、と判断している。<sup>(1)</sup>

地球上の自然と社会のバランスが急激に変化する状況で、「これから」を思う時、人間が持つて生まれ持った感覚、その上に養われる知恵を教えるのばしていく援助ができる大人、教員の質が問われている。どうもやる気が出ない、ワクワクしない、などと、子どもは、くない、をつぶやく。が、子どもの側にその問題の原因があるのか。極論を言えば、現場にいる教員を育てた今までの日本の教育制度そのものが数値評価で硬直化してしまい、そのため、枠にとらわれずに新しいものを創造する意欲や柔軟性を持った教員の養成に重きが置かれなかった、と言えるのではないか。教員側の責任は大きい。

この実践報告では、子どもへの芸術教育と日々の生活との関わりに焦点をあてて思索する。<sup>(2)</sup> 家庭の外（保育園、幼稚園、児童館、小学校）で長時間集団生活する子ども達を前にして、大人である教員が、何を見て、何に気づき、彼らとどのように関わっていくべきなのか。芸術の視点から（芸術活動を通して）、子どもの育みを援助するノウハウについて、米国モンテッソーリスクールでアート教員を勤めた自身の二十年間を振り返り、その記録から検証してみたい。

### 一、芸術活動を通して子どもの育みを援助

ここでは芸術教育を、A…芸術活動を通して育みを援助する、とB…芸術を教える、と二つ別なものと分けて考えてみたい。学校教育ではA…芸術活動を通して育みを援助する、とB…芸術を教える、の両方の充足が要求されるであろうが、教育の目指すところの混乱を私自身が避けるために、ここではAとBにあえて分けてみた。人間力の発達段階において、A…芸術活動を通して育みを援助する、が始めにありAを基盤にし、B…芸術を教える、という順番がある、と思えるからである。

## 二、オルタナティブ教育・モンテッソーリ教育理念との出会い

一九九〇年代の半ば、NYC市立大学の大学院で土粘土の造形を学んでいた時、たまたま「オルタナティブ教育」に出会い興味を持った。欧米では、従来型ではない教育法を総称して「オルタナティブ教育」と呼び、その一つにモンテッソーリ教育があげられている。自身の生活基盤となったマンハッタンのコミュニティでは（東京、山手線内程の大きさ）生誕百年を超えるモンテッソーリ教育が幼児教育から小学校教育までの広がりを見せており、当時でも十数校のモンテッソーリスクールが存在していた。運良くアッパーウエストサイド地区にあるモンテッソーリスクールで、クラスの見学や観察実習の機会を得ることができた。整然とした理念のもと、創造の時間に現れる子どもの喜びや試行錯誤の様子、また、子ども一人ひとりが集中し、小さい手を忙しく動かしている時間がとても印象的だった。

モンテッソーリのクラスルームには、自然のリズムで生活することや、子どもの敏感な感覚を通して、一つの出来事で完了とならない、常に動きのある人間生活を楽しむ実例が示されていた。「芸術を通して子どもの育みを援助すること」を実践するにはうってつけの「場」であった。子どもの行動をじっくりと観察しながら、子どももごころに戻り、その子ども時代に感じたこと、大人になる過程で失ったもの、忘れてしまったものを掘り起こすこと、これらは「日々の生活と芸術の関わり」の考察を進めたいと思う私にとって最も恵まれたスタートだったと言える。自然の神秘や偉大さ、日常生活のリズムをより深く感じさせるエネルギーがアート活動にある、と確信できるようになったのは、モンテッソーリの教育法に出会ったこと、そのコミュニティに入る機会があったからと言っても過言ではない。後二十二年間、マンハッタンのモンテッソーリスクールのアートルーム（アトリエ）で専門教員を勤め、地球上の自然、社会現象、歴史、宗教、道徳など、文化や科学の分野を包括的に（ホリスティックアプローチで）子どもの生活の中に紹介し、共に学びながら日々を過ごすことになった。

## 三、米国で注目を浴びるモンテッソーリ教育

帰国後日本でのモンテッソーリ教育の普及に興味を持っていたが、米国とはかなり状況が異なり、モンテッソーリ教育には、やや排他的なマイナスイメージや、

特別支援教育の一つと思わせる傾向も感じられた。米国では、モンテッソーリ教育の学校数は四千校から八千校と推定され、その中でも二五〇校は公立校、一二〇校はチャータースクールである。二〇一四年二月二十一日付ニューヨークタイムズ紙の教育面で、モンテッソーリ教育はイタリア、カトリックの教育家が説いた教育理念を持って普及したが、今やニューヨークのユダヤ人コミュニティに広がりつつあるトレンドでもある、と記された。そのキーワードは、engagement 深く関与できる、引き込まれ没頭することと cosmopolitanism 国家的偏見にとらわれない世界主義。一言にモンテッソーリスクールと言ってもその地域の文化や政治的、地理的条件や校長の方針でそれぞれ解釈に幅も見られるが、<sup>(3)</sup> トニー・ワグナー氏は著書「未来のイノベーターはどう育つのか」の中で、成功している若者を調べた結果、モンテッソーリ教育を受けた子どもが多かったと書いている。Amazon.com のCEO、ジェフ・ベゾスや、グーグルの創始者である、ラリー・ページとサーゲイ・ブリン（Google創業者）、ピーター・ドラッカー、また芸術方面でも、テイラー・スウィフト、ビヨンセと名前をあげている。<sup>(4)</sup>

## 四、子どもの「敏感期」の概念を謳った感覚教育

モンテッソーリ教育の目的は、「それぞれの発達段階にある子どもを援助し、自立していて、有能で、責任感と他人への思いやりがあり、生涯学びつづける姿勢を持った人間に育てる」とある。<sup>(5)</sup> だが、馴染みのあるキーワードが並ぶためか、米国で支持される教育法としての特徴が読みとれないであろう。モンテッソーリ教育は、人間の Sensitive Period センシティブピリオド「敏感期」と呼ばれる時期に着目する。そして一人ひとりの成長に合わせながら、その貴重な時期を分析し、独特な教育方法論を展開・確立させ今に至っている。

人は生まれながらにして自己成長発達力が備わっており、その力が現れるのが、子ども時代の感覚の敏感期である。この時期に五感、「視覚」「聴覚」「触覚」「嗅覚」「味覚」の一つひとつを丁寧に使うことによって、それぞれの器官が完成し、その機能が洗練される。それは、人間が外の世界と関係を持つのに大切な窓口になる。<sup>(6)</sup> モンテッソーリ教育の Practical Life (日々の生活) では、まず五感による丁寧な観察があり、より深い「気づき」から「学び」そして「築

き」へと展開が続く。



写真1 木枠に入った砂の上に指を入れて(触覚)  
アルファベットの文字の形(視覚)(概念)を一つずつ学んでいる様子

## 五、生活を入り口として

### その1

日常生活の事象の観察は「識別」から

日常生活の事象の観察は、「識別」の概念を学ぶことから始まる。「識別」とは、*Isolation of difficulty* [「困難の識別」と呼ばれるもの]、*Pairing, Grading, Sorting* という三つの柱を持って検証していくものである。<sup>(5)</sup>この方法は、日常生活、社会生活の入り口に立つ子どもへの手引きの一つとして興味深く使えるものである。自身の勤務していたモンテッソーリスクールでも *Primary* (幼稚園) として *Elementary* (小学校) のホームルームで、毎日の学習の基盤となっていた。

複数の事象を目前にし、何から手をつけていいか途方に暮れている子どもに、まず、その情報や事象のかたまりを部分に分け、順序立てて受けとめていける

よう、導入・補助をしていく。大人にとっては、そのコトが日常の一つの流れの中の単純な事象・行動でも、幼児、子どもにとっては、圧倒的なコト・行動として受け止められることが多い。(現在の生活には、いくつもの感覚器官が複数同時に刺激されるコト・行動の方がより多く、大人にとってもその状況処理に気をもむ場面が多々あるであろう。)この過程で意識すべきことは、子どもの感覚を穏やかに刺激しながら知覚の発達を促していくこと、特にそのフロー(流れ)が子どもの中に自然に存ることである。

例えば、テレビを見ながら夕食を食べる。これは、単一の行動ではなく、複数行動である。テレビを見ながら(視覚) + (聴覚) 夕食を食べる(味覚) + (触覚・舌触り)。この環境に幼児がおかれた場合、その幼児は無意識に、周りに起こる全てを吸収するであろうが、それは混沌とした感覚印象になるであろう。モンテッソーリ環境ではこのように一度に複数入り込む刺激の波(行動)に対応する際、まず、「場面」をそれぞれ単一の感覚の動きに分けながら、一つひとつ別途に処理していくのである。

この「識別」の三つの柱になる *Pairing, Grading, Sorting* [類似のペア組、段階別分け、グループ分け] は、次のように説明される。

*Pairing* ペアリング…二つの「もの」を比較し、サイズ、色、形、重さ、強さなどから、一つの性質を取り出し対にする。

*Grading* グレーディング…三つ以上の「もの」を比較する。一つの性質を取り出し、段階付けをする。

*Sorting* ソーティング…三つ以上の「もの」から一つの性質を取り出し比較。例えば同じ「もの」同士を集めたり、全く違う「もの」同士を集めるなど。<sup>(6)</sup>

子どもは、目の前の複雑に絡んだ現象から、識別をするヒントをしきりに探す。その場では、慌てることなく観察でき、順序立てて提示が可能な環境設定が求められる。時にはその識別を手助けするために作られた教具の導入も施される。これらの教具は、子どもが(大人でも)まず触りたくなるもので、手に取れる子どもサイズであり、かつ良質の木の使用で子どもの気づきを刺激する要素が巧妙に分析されている。モンテッソーリ環境のホームルーム教室では、この *Isolation of Difficulty* [「困難の識別」] に基づいて、*Pairing* ペアリング、*Grading* グレーディ

ング：Sorting ソーティングの方法が運用され、特に、Primary（幼稚園）時期、三才〜五才、でその練習が行われる。



写真2 この肌触りは？

その2

「事象の「識別」から「収集と融合」へ」

「識別」は、子どもの成長段階に応じ、次の「収集と融合」へと展開していく。Elementary（小学校）では、その展開活動が常に促される。子どもは事象の関連性に気づきだし、次のステップになる新しいアイデアを引き出し「築く」ためのコネクション作りを試し出す。Making connections・Expanding connections（鉤の手の原理）と呼ばれるプロセスである。

一つの事象は一つの独立した出来事（点）として閉鎖的に存在しているものではない、という考え方がモンテッソーリ教育の根底に流れている。子どもは教員の励ましを受けながら、繰り返しの練習や振り返りを重ねることで、今の



図1 モンテッソーリの教具

活動に前段階からの繋がりがあることを見つけ、「次にこうしたい」「試してみようか」「もっとやってみようか」とエネルギーを注いでいく。そして、「できた！」「見てみて」というこどもの声が響き歓喜に湧く。今までひとりできなかったことが少しでもできるようになり、次にどう動けばいいかが身についてきた瞬間である。一つの活動・気づき、また達成感はその場限りのものとして終わるのではなく、関連のある次への発見へ、ごく自然に導かれる。複数、別個の体験が関わりを作りながら日常生活の中で繋がりが、生きる環境を豊かにしていくことを感じ学んでいくようになる。

「識別」から「収集と融合」「全体・包括的な理解」への方法が、Primary（幼稚園）とElementary（小学校）のモンテッソーリ環境のホームルームでは自然な流れとして浸透している。「手を動かす」ことを子ども達に促している教員の姿が目につく。手を動かすことで脳の発達を促し、次の行動へ導いていくという人間の運動のメカニズムの理解が教員の中に十分に浸透している証である。<sup>9)</sup>

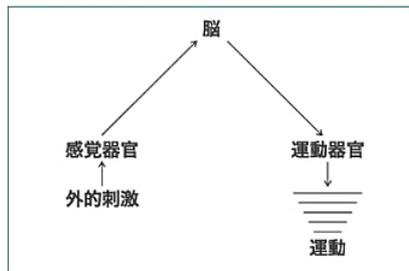


図2 運動のメカニズム

六、メトロポリタンモンテッソーリスクールでの実践

(一) 学ぶ環境

マンハッタンのメトロポリタンモンテッソーリスクールは、Primary（幼稚園）Elementary（小学校）のレベルがあり、合わせて三六〇人前後の子どもが集まる学校である。Primary（幼稚園）とElementary（小学校）には、それぞれホームルーム、ロビー、庭、多目的ルームが備わり、モンテッソーリ環境の理念に則って

造られている。



写真3 メトロポリタンモンテッソーリスクールの正面  
2015年秋に撮影

#### Primary (幼稚園)

二才八ヶ月から五才までの子どものグループである。特に、*Practical Life* 「日々の生活」に重点が置かれ、レッスン(授業のこと、以下レッスンと示す)と自主活動のバランスは発達段階や子どもによって異なる。子どもが自分で考えた活動に対しては、それが発達段階に応じ適切なものであれば、教員はコーチとして寄り添うのみの行動になる。が、随時、モンテッソーリの教具を用い、レッスンを補いわかりやすく導くことも怠らない。四才までの子どもは、目の前にしているものが、触っているものが何であるかはあまり意識せず、見たもの、口にしたものの味、聞いた音、触った肌触り、匂いのするもの、それらの感覚的印象を体に吸収し、次の行動へ移る。同じ教室にいる年長児童とともに遊びながら学ぶ子どもが観察できる。六才までには、既に体に溜め込まれた感覚的印象を整理し、分類し、秩序化していく活動に惹かれていく様子が見られる。モ

ンテッソーリ教具を使用する活動に飽き足らず、自ら材料を集め道具を作り始める子どもも現れる。

#### Elementary (小学校)

低学年では、通常の小学校科目の教科、つまり算数や言葉、地理、歴史、理科、社会、体育、図工、音楽などは、*Practical Life* 「日々の生活」の中で包括されている。高学年になると、低学年の学びから枝分かれした、専門的な学習が導入される。またコミュニティサービス活動や、マンハッタンの北、車で一時間半の山中にある校舎への登校日があり、自然を体験する授業日が月ごとに計画されている。

#### Primary (幼稚園) と Elementary (小学校) の時間に共通する流れ

登校時の朝会以降午前中の三時間は、子どもが自らワーク(モンテッソーリでは学びの活動をワークという)をする。自主的に内容を決めて実行し、各自その学びの内容をジャーナルに詳しく書き留めるといふ学習法をとる。ワークの内容、振り返りは、教員と個人的に行われる。発達段階に応じた学びは子どものペースで進めていくが、その週に必ず学ぶべきレッスンについては、グループごとに教室内の一箇所で、教員がリーダーシップをとりながら行なう。小学校低学年は、教員がこのようなレッスンをする時間が多い。午前中の三時間のサイクルの流れは、*Primary* (幼稚園) も *Elementary* (小学校) も基本的に同様である。

#### アートルーム(アトリエ)教育

私の担当は、ホームルームとは別の場所に造られたアートルーム(アトリエ)でアート活動のカリキュラムを作り、レッスンを実行し、そのプログラムを運営することだった。しかしそれは、「領域全ての教育はモンテッソーリ環境内のホームルームで実施される」というモンテッソーリ協会の理念から外れるため、プログラムとして認められず、モンテッソーリ協会による認可過程では論議にならなかった。だが、「芸術・アートの力が生活を支える」ことを、子どもの体により深く浸透させたいという当時の校長、ラマニ・デアリス氏の強い信念から、メトロポリタンモンテッソーリスクールでは、一九九六年秋からアートルーム(アトリエ)教育が始まった。環境と理念をアトリエ体験で結び「芸術を通して生

「芸術活動の中で育みを援助する」という実践を試すものだった。

アートルーム（アトリエ）で行なうアート活動は、子どもの生活の中の気づきに、より効果的な刺激を与えることを期待された。レッスンを受ける子どもは、モンテッソーリ教室での感覚教育が導入され安定してくる時期であり、また感覚教育を基に記憶、想像、思考といった知的活動をする段階にとどいていた。アートルーム（アトリエ）環境は校舎内ではあるが、モンテッソーリ環境教室から離れ、日当たりと眺めに恵まれた階上に設置された。その活動の初代担当に、自身ともう一人のアーティストが選ばれた。子どもに自信と満足感を与えられる、「感覚教育」の実践へ、学校をあげての取り組みとなった。対象になる子どもは、人間の発達段階で感受性が最も強くでてくる敏感期 Sensitive period を持つ、四才児グループから十二才児までと幅は大きかった。学校や父兄からの期待に応えようと万全を尽くし、充分にアート活動ができるよう環境は整えたが、現実的な予算や時間の制約、クラス内の子ども数の変化も無視できなかった。運営面ではシングルレッスンの単位時間が四十五分に定められた。ダブルレッスンの計画も可能であったが、時間には制限があった。

## (二) しかけ〜導入

教員にとって、when、時期、時間帯、whom、対象になる子どもの把握、how、どうやってアートレッスンを導入するか、これらが要であり、また悩み抜くところであろう。が、私自身、「導入」と「しかけづくり」は苦になるところが好きなことだった。そのプロセスは、子どもの世界の探偵になるように興奮もした。ただし「導入」では、モンテッソーリ理念に基づいた方法を慎重に検討し、何度も編集した。感覚教育の中でも、見る、触る、嗅ぐ、聞く、感じる、を中心に、「素材・材料」「道具」と「概念・コンセプト」を分けた導入法をつくり実践してきた。「しかけづくり」は、一人仕事でなく、各ホームルーム（モンテッソーリ環境の教室）の教員と同じ理念を持って、学習目標、進行状況を共有しながら連動体制で練りあげ、繋がりのある活動をほぼ同時期に実施することが何よりも大切だった。また、アートレッスンを進行するにあたりその基本になる活動の導入法はわかりやすくチャート化して提示した。「A」：素材、道具と「B」：概念を分け、Isolation of Difficulty [困難の識別] の理論を明確に表した。

<p><b>[A] 素材 道具</b></p> <p>材料の紹介                  道具の紹介                  目、手、指のコントロールの練習                  Fine motor coordination                  Hand-eye coordination</p> <p>紙                  紙ってなに？                  紙を使っていったい何ができるの？</p> <p>筆                  筆ってなに？                  筆を使って何ができるの？</p> <p>鉛筆                  クレヨン                  粘土                  ひも</p>	<p><b>[A]と[B]を</b>                  ゆっくり                  丁寧に                  結びつけて                  作品にして                  まとめていく</p>	<p><b>[B] 概念 コンセプト</b></p> <p>概念(コンセプト)の紹介                  線、形、感じ フィーリングを話す                  ストーリー (もしも...)</p> <p>線、点、丸                  尖った頂点がない形、まっすぐでない線</p> <p>四角 4つの頂点、線はまっすぐ</p> <p>高いビル、高いタワー                  徐々に積みあげる</p> <p>四季                  春：桜が咲いてあたたかくなる                  庭が色とりどりになる</p> <p>感じの対称                  暖かい vs 涼しい 滑らか vs 荒い</p>
--	---	---

図3 導入プロセスのチャート

導入のプロセス・チャートの見方  
 一、新しいアートレッスンを導入する際、その課題を素材、道具、「A」と概念(コンセプト)、「B」に分ける。  
 二、学びの順序として表の「A」から導入を始める。

三、「A」が入った後、概念(コンセプト)・「B」については丁寧に時間をかけて入れる。

四、最後に「A」と「B」を丁寧に結びつけ、課題をまとめていく。

以下にあげた実践記録は、「Primary(幼稚園対象)からElementary(小学校低学年対象)への継続した流れを意識して組み立てた自身のアートレッスンの導入と展開のドキュメントである。「もつと続けたいな」「時間があつたという間に過ぎたね」「つくるのが面白かった」という声があがった人気の高いレッスンをここに集めてみた。ねらいはわかりやすく、プロセスは簡潔に生き生きと動かしていく。きっかけ作りになる質問を投げかけ、「教える」のではなく、problem solving「解決の道を子ども達に気づいてもらう」ことを意識している。

Primary(幼稚園)からElementary(小学校)への移行期においては、アートルームで行なうの活動が一つの「橋渡し」になるため、理念に基づいたアートレッスン導入法をより丁寧に運用し、感覚教育と知覚教育を繋ぐ工夫が必要とされた。

### (三) 実践

#### 「A」素材の導入・幼稚園で

レッスンタイトル「紙ってなーに」

ねらい…紙を知る、紙の使い方の導入

対象 …四才―五才

実践ノート

こどもがアートルームに入り、着席する。

ホームルームで何をしていたの？

お絵描き

(教員の声で始まる)

おもしろかった？

うん、とっても・あまり、

どこに描いてみたの？

紙に！

他にも描けるところがある？

机の上？

床の上？

手に？

じゃ、紙って何だろう？

これは何？

紙だ！大きな紙！

そう、大きな紙を持ってきたよ

皆にあげるから、紙を調べてみようか？

生徒たちは紙を受け取るとすぐ触り始める、声も出てくる。

紙で何ができるかな？(教員は紙でできるものを生徒から聞き出す)

穴開けちゃえ！

頭にもかぶれるよ！

マントにもなるよ！

スカーフにもなる、あつたかい

紙っていろいろに使えるのね。今日は紙の上に描いてみようか？

何で(何を使って)描く？

さっきもらった鉛筆で描くよ

そうね、でも鉛筆って何？

どうやって鉛筆を持ったら描けるの？

このように、素材を紹介し体を使って感じていく。

「紙とは」が導入された後に、描くということ、XXを使って描くことができる、ということを変更して確認し、皆で楽しむ。



写真4 紙ってなに？ 紙で何ができるかな？

「A」道具の導入・幼稚園で  
レッスンタイトル「筆ってなに」  
ねらい…筆を知る、筆の持ち方、使い方の導入  
対象 …四才ー五才

実践ノート

少し長めの筆を見せる。

これ何？

筆だよ！

触ってみたい？皆に一本ずつあげるね！

持てる？鉛筆持てるよね、それと同じだね。3本の指で掴んで。どこを持つかわかる？

毛がついてる！ 棒の上に毛がついてるんだ。棒のところを持つたらいいの？

そう、毛がついてるよね。毛はつかまないので。でも、毛ってどんな感じ？ 手の上を撫でてごらん？

ソフト、チクチクする！

他に棒の上に毛がついているもの知ってる？

あつ、僕の歯ブラシ！

じゃ、これ歯ブラシ？

ちがーう。歯ブラシはどこを持つ？

でも、持ち方が違う（生徒たちは歯ブラシを思い浮かべる）

なるほどね

のりを使うとき、何を使う？（モンテッソーリでは液体のりの使用は筆で）

筆  
これと同じ筆？

違う

どこが？

もつとちっちゃくて、これより短いよ。（子どもはのりの筆を思い浮かべる）

そうね

では、今持っているこの筆、いつどこで使うか知ってる？

絵を描くとき！

どうやって使うの？

絵の具の中に毛をつけるんだ

やってみたことある？

この導入はゆっくりと、日常生活で使う「他の筆」を思い出す時間も含めて、丁寧に行った。筆は大事に使うもの、筆の洗い方、筆の保管まで話を進め、この導入は終わる。筆とは何？筆の使い方の導入後「私達の街、NYC」を表現した。



写真5 上:筆とは? 下:筆を使って「私達の街NYC」を制作中

### 「A」筆の導入後 展開応用編・幼稚園から小学校へ

「アート活動を通して古代文字の誕生の学びを深める。ホームルームとアートルームでの連動活動」

レッスンタイトル「自然の材料から生まれるマーク(暗号)メイキング」

素材・材料・道具:自然の中で拾ってきたもの、木切れ、乾いた草、木の実、

アートルームのキャビネットにあるもの、紐、羽

キーワード:マークメイキング、スタンピング、文字、メッセージ、伝える・

伝わらない

ねらい:マーク(暗号)メイキングをするアート活動を通して、文字の誕生、メッ

セージの記し方の検証、歴史的な背景まで総合的に網羅する

対象 …六―七才

実践ノート・1

すでに筆を使って紙に描く、という導入があった後、筆で描く対象について、なぜ、描く(書く)のかという、描く(書く)の概念について話し合った。モンテッソーリ教室(ホームルーム)では古代、文字の起源と記録、マークメイキングの導入が既に実行されていた。

アートルームでは、マークメイキングの体験を試みた。マークメイキングの背景と意味を振り返り、マークを生み出す材料として筆以外に何かあるか問いかけてみた。休み時間に公園に出た際に、一人の子どもが、川沿いで自然物を拾い集めてきた。その自然物(石や葉)を材料に古代人の真似をし、紙の上にマークメイキングを始めた。同じ週の別クラスで「インクとは何か」の導入があったため、子ども達はインクを使ったがり、紙の上にそのインクで自由にスタンピングしながら何やら表現を始めた。

教員の介入は、自然物をわかりやすく机の上に並べること、インクを小さいプラスチックの容器に入れること、自然物や古代のマークメイキングに興味を持った子どものリクエストに応じて茶紙を切って配ることだけであった。

### 実践ノート・2

集めてきたものは何?

葉っぱ、石、木切、羽

それをどうするの?

インクをつけて、マーク(暗号)を紙の上にペタペタつけてつけるんだ。

マークって何?

秘密みたいの

マークで暗号とか、手紙がかかるかな?

うーん、暗号かな?

自分の名前でもいいよ

やってみたい?

うん、自分の名前をマークで描いてみる!

集めた材料をテープで付け合わせたり、ゴムで巻いたり、手を動かしながら、マークの種類を増やそうと試行錯誤が進んだ。比較的真っ直ぐで、長めの木の枝や細めのパイプを使って筆ができることを、一人の子どもが発見した。「私も筆、つくる!」と、そこで誰もが筆作りに移った。世界に一つしかない自分の筆を使って秘密の暗号を表現しようと、子ども達はその過程に没頭していた。



写真6 マークメイキングに没頭する様子

マークで秘密のメッセージが出来上がった後に、そのメッセージが実際に伝わるのかを試してみた。子ども達は規則的な文字にこだわらずにマークを模様として表したため、友達にはマークの内容が伝わらず、まさに、秘密の暗号となり、「伝わる」メッセージ性に欠けることに気づいた。「見やすいマーク」と「なんだかわからないマーク」があることを確かめた。

ホームルームで導入された、古代文字の成り立ち、ヒエログラフや亀甲文字の学習の直後にマークメイキングの制作活動があり、アートルームの空気は興奮

に満ちていた。ホームルームとアートルームとの連動で、課題のスケールは大きくなっていた。「実際にやってみる」ことで学びはより深まり、「形と記号」「記録を伝える意味」が少しずつ理解できているように感じられた。

次の展開へ

マーク付きの茶紙を見せ合いながら、そのマークの形から見立てをする活動を促した。

Aちゃんのこのマーク、何に見えるかな?

アルファベットのJ

このマークと似ているマークはどこにあるかな?

ここにあるし、ここにも

Aちゃん、どうやって、このマークができたの?

子どもは見つけたマークを忘れないように、見立てのノート作りを進めた。先生、アルファベットってこうやってできたのかな?

マークメイキングの活動から、「古代文字の誕生」、「文字のコンセプト」、「伝わらない・伝えるためのコミュニケーション」への展開が実感できたようだ。

「B」概念(コンセプト)の導入・幼稚園で

レッスンタイトル「線の家族を探してみよう!」

素材・材料…紙、鉛筆、消しゴム

キーワード…線、まっすぐな線、丸い線、波打っている線、ギザギザ線、角ねらい…どんな線が身の回りに存在するか、線とは何かを検証しそのコンセプトを導入する

対象 …四―五才

実践ノート・1

鉛筆とは、紙とは、という A…素材、道具の導入レッスンがあった後にくる導入である。

鉛筆を握って、手や腕を大きく動かすと、紙の上に色々なものが現れてくる、ぐじゃぐじゃでいいからたくさんやってみてごらん、と誘う。子ども達は、周りをしながら、手を動かしていく。三十秒ほど気ままに描く時間を与える。その後、描いた紙を見ながら何が見えるか(見立て)を話し合い、「識別」をしてみた。どの子どもも「見立てたもの」を自由に言葉で発表し意見交換できるように、数人のグループに分けてレッスンを進めた。

## 実践ノート・2

これ、なんて呼ぶか知ってる？  
名前があるのだけど  
線！

紙の上にたくさん、いろんな線が描けたね。線、みんなと同じように線にも友達がいったり、ファミリーがあるのだけど、知ってる？ 自分が描きこんだ紙、友達の間を見ながら発見を促す。

まっすぐな線とか曲がった線  
まっすぐな線ってどんなの？

前に進む線。後ろに進んでもまっすぐな線があるよ  
まっすぐな線ってこのアートルームにある？

では、曲がった線ってどんなの？  
このアートルームにある？  
みんなで探検してみよう！

今まで座っていたことも体を動かす。二分間の探検の後、見つけた様々な線を発表しあう。それぞれの特長からグループを作りわかりやすく一覧表にまとめて提示する。

みんなの机は、どんな線でできていた？

まっすぐな線でできてるよ、大発見！  
ここは？(机の角を触る)  
危ないところ

どうして危ないの？  
とんがってるから！ぶつけたらすごく痛いんだよ  
このとんがって危ないところ、なんていうか知ってる？  
角

角ってどうやって描くかな？  
きゅって、ここで曲げるんだ！  
えっ、曲がらない。曲がるよ。あれ、向きが違うんだ  
向きって何？座ってごらん、そして、前を向いて私を見て？ はい、それから  
あっちの窓を見て？  
今どうやった？ 首曲げた！  
線も向きを変えたら曲がるのか？

(アートルームにある円皿を目の前に出して)、  
この形は？  
まる！

じゃ、まるってなんだろう？  
さつき、誰か紙の上にもまる描いたお友達いる？  
どうやって描いたの？  
わからない、自然とできちゃった！

じゃ、描いてみようか？描く時はどこから描くのかな？  
描き始めがどっかにあるのに、まるには始めと終わりがないよね  
描いてみる？どんな感じ？  
赤ちゃんのまるがここにある！

小さいよ、とっても、見えないくらい小さい  
ぼつぼつみたいなの小さいまるがここにたくさんある  
ハムスターのうんちだ(ハムスターは教室で飼っているので毎日観察している)

このレッスンでは、線から始まって、直線、カーブのある線、角のある線、

丸を導入。最後にリストにして提示した。

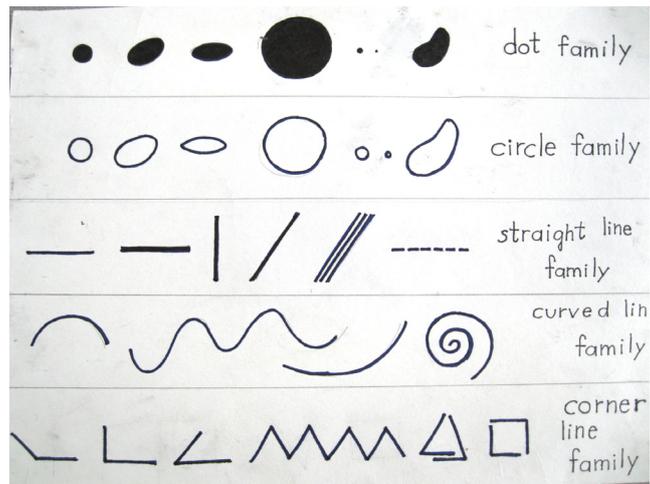


写真7 線のファミリー

ここまでの導入で、「A」素材・材料：紙、インク、絵の具、そして、道具：鉛筆、筆が入り、「B」概念(コンセプト)：線とは、線の種類、セルフポートレートとは、が入った。

「A」+「B」導入を合わせる、一つの課題にまとめる・幼稚園で  
 レッスンタイトル「自分の顔をみながら、描いてみよう」

素材・材料・道具：鏡、紙、鉛筆、のり、筆、  
 ねらい：よく観ることを練習させる

「まず観察して、観て描くこと、視覚と手指の運動を通して、顔とは、顔にあるもの、その位置、数、バランス、大きさ、特徴を見つけ、手を動かすことを促していく。」

対象：四―五才

実践ノート・1

上記の導入、「A」と「B」をまず入れた後に、このレッスンの導入に移ることを薦めたい。「A」と「B」のレッスンのねらいは、今何ができて、何を知らなくて、何をしてみたいか、が頭と体の中で順序立てられるようになることである。ここでは「A」と「B」を合わせ、セルフポートレートを描くという表現を試みる。

セルフポートレートを つくる課題は、子どもの持つ感覚器官の複数が刺激され、また各子どもの知的発達段階も影響するため、いつ始め、どう進めていくかを考慮すべきであろう。またセルフポートレートの完成が最終目的でなく、他のレッスンと連動することで、次のプロジェクトへの足がかりになることも考慮してみたい。

実践ノート・2

鏡は個々の机に配られている。ここからたくさん質問を投げかける。

自分の顔見えるかな？

今日は、どんな顔をしてる？

歯を磨いてきた？

いい顔ってどんなのかな？

わらってみて？

今日何するかわかった！

写真撮るの？

あつ、自画像でしょ

でも自画像やだな、

なぜ？

恥ずかしいから

みんな恥ずかしいの？

私、恥ずかしい

顔を描くの好きな人？（あまり手を上げない）  
なぜ？  
難しいから。



写真8 ぼくの顔

じゃ、鏡で遊んでから、ちょっと違うやり方してみようか？  
うん  
怒っているとどういふ顔をする？  
目はどこにある？ いくつある？目の上に何かある？  
鼻はどこ？いくつある？  
口はどこ？いくつある？ 口の周りに何かついてる？  
口を開けたら何が見える？  
今日、自画像は描かないよ。  
顔の中で一つのものだけ、よく観察してみよう。どう？

一つを観察するのは？  
鼻がいいや！  
はい、では、鼻をよく見て紙に鉛筆で書いてみよう。  
どんな形をしている？  
変だな？ どうして？

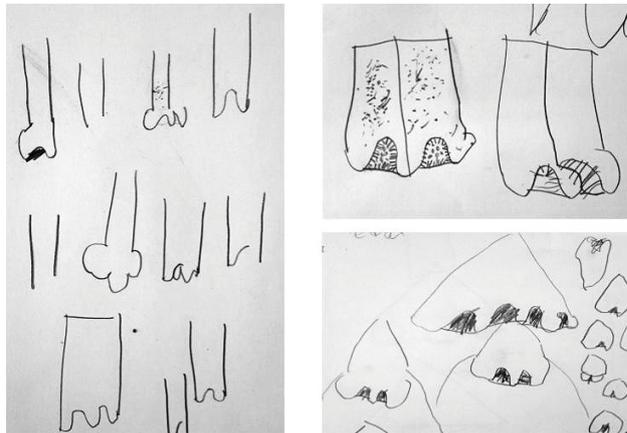


写真9 よく見て描いた鼻

鼻に穴がついてるから！  
いくつついているの？  
二つ、えっ三つ！えっ四つ！  
この穴なぜついているんだろう？  
その穴の中どうなってるの？  
トンネルみたい、繋がってるよ。  
そのトンネルはどこへ行くんだらう？  
鼻の中が暗くて毛が生えてるからよく分らない！  
紙にたくさん鼻描いて練習してみろ？  
できるだけたくさん描ける？！  
私たちと同じ鼻を持っている動物知っている？  
猿かな？

うさぎや犬の鼻は？  
違うよ、  
何が違うの？  
色、形も！  
何が一緒？  
二つ穴があるよ。  
そうね、  
これで鼻のレッスンを終わります！  
（次の日）  
今日は、顔の中で何を観察したい？

目  
僕は目の場所を調べてみるよ  
二つの目は離れてるからね〜



写真10 2つの目、どのぐらい離れているかな？

どうして、離れてるのかな？  
知らない 不思議だ！  
知ってるよ、一つつぶれても、もう一つあるから大丈夫  
二つつぶれたら？  
そうならないよ  
どうして？  
もう一つはすぐ治るんだ  
へー便利ね  
目は動く？  
目の玉、動くよ

目の中に何か見える？  
筋が入ってる。綺麗だ！  
目の周りに生えている毛の名前を知ってる？  
眉毛、まつげ、上と下についてるね  
じゃ、目を鉛筆で、紙に描いてみようか？  
僕の目のここに、魚みたいなのがついてるんだ  
私たちと同じような目を持っている動物はいるのかな？

今日は口を観察してみようか？

口は開いたり閉まったりする

いつ開くのかな？

話すとき、食べるとき、笑うとき、時々寝てるとき

口はどう開くのかな？

上と下がパクパクする

唇があるよ

いくつ？

二つ

線がついてる

私の唇は乾いているからリップクリームをぬっているの  
お母さんは口紅をぬってるよ

この方法で、顔の中全てのもの、目、鼻、口、と順に観察し、それぞれを紙  
いっぱい描き続ける。描いた紙は一度子どもに戻し、どれだけ観察できたか、  
その成果を話し合う。その後、それぞれ一番好きな、かっこいいものを選択さ  
せ、自分の顔にしてみようか、と提案する。

さて、選んでどうする？

いちばん好きな目を、鼻を、口を、を切り取ったら？

切りとりたい！

何で切りとるの？

ハサミ

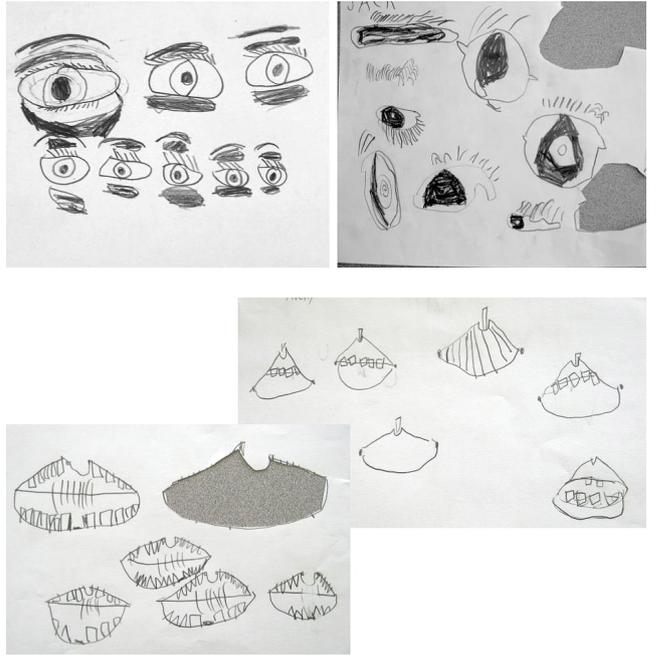


写真11 上:よく見て描いた目 下:口

ハサミで切り取ってどうしようか？  
 貼り付ける！

まず顔の形だけを描いて、そこに切りとった目、鼻、口を貼り付けていけば？  
 と子どもからアイデアが出てくる。(福笑いの発想で)

顔の形の練習をしてみよう！

もう一度鏡を良く見て、顔の形を練習し、一番気に入った顔の形を選ぶように促す。目(二つ)鼻、口を選んで、それを切り取る。この段階でハサミの導入は終わっている。自分の顔の中に、切り取った目、鼻、口をのりで貼り付ける。(液体のりはプラスチックの小さな入れ物に用意され、それぞれのりの筆を用意する…導入済)子ども好みで、髪の毛を加えたり、また耳や首を描き入れたり、名前を入れたり、自由に紙を埋めていく。

ひとりのできたよ！  
 アートルームにいる児童皆、セルフポートレートを完成させた。

セルフポートレートが出来上がった後の展開は？

セルフポートレートのレッスンの中で、こどもから出た言葉、質問を拾い、ホームルーム教員のレッスンと連動させ、その課題の広がりを探っていく。子ども言葉の言葉を拾って作ったリストは次の通り。このリストから次のレッスンが開する。

私たちの目の仕組み

ペットの犬や猫の目との比較

見えるってどういうことか

光を感じることは

口のできるのか

食べるとは

歯で噛む、歯って何

話す、歌う、泣く、

口からどんな音が出るのか

どうしてどこから言葉や音が出るのか

鼻の仕組み

象の鼻と犬の鼻の比較

匂いがとてもよくわかる動物は(嗅覚)

その動物はどこに住んでいるか？



写真12 自分でできたセルフポートレート

「A」+「B」セルフポートレート（色と肌触りを入れた応用展開）・小学校で  
（ホームルームで行ったセルフポートレート鑑賞授業とアートルームでの創作活動）

レッスンタイトル「カラフルなセルフポートレートづくり」  
素材・材料・道具…ダンボール、毛糸、雑誌、鉛筆、クレヨン、ハサミ、のり、筆、スコッチテープ、大きな茶紙  
キーワード…色、テクスチャー、自画像、バックグラウンド  
ねらい…身の回りにあるものが素材になる  
触感を探し出す…髪の毛や、シャツにふさわしい素材を見つける  
対象 …六―七才

実践ノート

小学生は、幼稚園で素材、材料の導入がかなりできているので、アートルームにある素材はほとんど自由に使える。

ホームルームで、セルフポートレートとは何か、ピカソ、ゴッホ、モディリアーニが紹介され、画家の描いたセルフポートレート作品の写真を観て形、色、表情についての導入と学習が終わっていた。

このアートレッスンで使う材料は、通常の白い紙ではなく、ダンボール箱（廃棄となったもの）を壊して、鏡とほぼ同じ大きさに切ったものをあえて選んだ。ダンボール上に描くことが、非日常的で、いつもと違った子どもの反応が新鮮だった。子どもは鉛筆・クレヨンとダンボール紙が触れる感覚を楽しみ自分を「見ようつす」作業が進んだ。



写真13 シャツは雑誌からとった色紙を貼って、、、



写真14 仕上がってきたセルフポートレート

「A」+「B」セルフポートレート課題の応用展開・幼稚園から小学校へ  
（ホームルームとアートルームとの連動活動）

セルフポートレートのレッスンでは「セルフ」・自身を客観的に観る練習をした。「セルフ」・自身・私を意識しながら、その次の段階では、「私の好きなXXX」「私の嫌いなXXX」を、色と形で表現することを促した。友達同士でも嗜好の相違・類似があることに気づき、それを受け入れるというレッスンに展開していった。

#### 幼稚園、四―五才の例

一、私の好きな・嫌いな色を集める、紙の上に表してみる、なぜなのか（視覚、感覚、環境、感情）

私の好きな・嫌いな色を教室で・公園で見つける（視覚、感覚、環境 — 季節）  
二、私の好きな・嫌いな食べ物の色を集めて並べる（視覚、感覚 — 食育）

昨日の夕食で食べたものの色を思い出して、模様を作ってみよう、気づいたことは？

三、私の好きな・嫌いな肌触りを集める、それを言葉ではどうなの？（触覚、言葉―国語）

四、私の好きな・嫌いな動物その肌触りは？（触覚、動物、鳥類、爬虫類―理科、生物）

#### 展開するレッスン例

レッスンタイトル「私の好きな色、嫌いな色」

素材・材料・道具・市販のテンペラ絵の具、紙、筆、  
キールード…色、私の好きな・嫌いな

子どもは、紙の上に直接テンペラ絵の具を出し（パレットや水を使わずに）筆や指で自由に色を混ぜながら、「好きな色」と「嫌いな色」を作り、発表した。



写真15 作品例 幼稚園(5才) 「私の好きな色、嫌いな色」

## まとめと考察

「自分でできたよ!」「ああそうか、全てが繋がっているんだ」「もっとやりたい」という子どもの歓声が上がる度に、嬉しさと満足感が湧いてくるものである。子どもの「不思議さに目をみはる感性 (the sense of wonder)」に包まれたモンテッソーリスクールの生活は、「日本で育った子ども時代」を再度呼び起こす自身のタイムトラベル体験でもあった。レッスンターマの中に日本(母国)の文化や価値観を入れるように、と助言され、その機会に日本の手遊びやおもちゃ、日本の昔話集をできる限り探ってみた。アートルームで学ぶ子ども達の興味や生活領域をできるだけ大きく広げたい、という思いからであった。

米国で経験したモンテッソーリ教育実践は、日本の幼児・小学校の教育環境に合わせた日本型のモンテッソーリものとは異なる。ただし、芸術活動を通して感覚教育の目的は、子どもの「作品完成」に重きを置くのではないこと、また「教具」を使つての練習や訓練の達成でもないことは、国境を超えて共有できるところであろう。生まれてきた人間が目指すところは、「日々の生活」の中に混在する様々な事象・問題解決の糸口を探る感覚と知覚を常に洗練し使つていくことではないか。子どもの学びの場で、科目ごとにそれぞれの「教科」をきつちりと教える方法もあるが、その分科された科目を日々の生活の中で繋ぐ実践をし、総合的な観点を養う時間をつくること、同時に身の回りの観察から「なぜなの?」「わー WOW」を引き出し、「識別」から「収集と融合」、次に「新展開まで」の学びの流れ(フロー)を導く試みが検討されるべきではないか、と思う。

カリキュラムづくりでは、学年の節目に「このような子どもに育つて欲しい」という子どもの未来像、目的(ゴール)、を描くことが必要不可欠である。教員はそのゴールに立ち、「いつ、何を導入していくのがベストなのか」を各ホームルームの専任とアートの教員が同じテーブルで話し合う。対象になる子どもの様子、例えば、子どもが飽きるまでやめない活動は何か、面白がっているコトは何かなどの観察結果を出し合い、随時調整をしていく。そのため、学期が始まる以前に指導案が完全に固まることはなかった。日々臨機応変に、あえて言えば、その日の子どものエネルギーのレベルで、活動内容の再調整を瞬間的に入

れこむことやその組み替え・変更が認められていた。なぜなら感覚が敏感な子どもから生み出される日々のエネルギーが「生活」の源であり活動の全てを支えている、という信念があったからである。教員同士の密なチームワークのもと、「生活」全体を見る包括的なビジョン(ホーリスティックなアプローチ)で、観察、驚き、疑問、気づきから築きへの柔軟なプロセスを丁寧な持続させていくことは言うまでもない。教員一人ひとりの人間力、そして、日々の学びの根っこに芸術(アート)があることの理解が問われるところである。

芸術(アート)を通した学びでは、年間テーマを一つ掲げるだけで、充分に楽しく運用できる。人気のあるテーマは「季節」。漠然とした「季節」というものを身の回りに落とし込みながら、子ども達と想像を広げていくことは興味深いものだった。例えば、春の場合、春の色は?春の形はあるのかな?春の匂い、春の肌触りを集めてみよう、春の不思議、春の気候と現象、春の動物「生物」、春の植物を描いてみる、春の食べ物は何?「野菜・果物から食育」、春の病気「健康・生物」、春の音楽、春のスポーツ、春の行事「地域・文化・宗教」、春が存在する場所としない場所「地理」と次々に総合的に集めビジュアル表現を促してみる。

算数、国語、理科、社会という科目の区分はなく、気づきと学びが自然と合科し、日々の「生活」が既成の教科を包み込む。アートレッスンの導入は、まるで湖の上に一つの石を投げるようなもので、その波紋は外へ外へ拡がり、科目の境界を越え響き合いながら動いていくものである。芸術(アート)の観点で総合的に日々の生活を意識したすと、学校で習う教科を科目に分けて学習することに不自然ささえも感じるようになる。

米国での教育主任・自身のメンターであった、ボブ・レベリ氏は、日々、教員にリマインダーを出していた。「子どものスパーク(輝く瞬間)を今日はいくつ掴んだか?」「あなたの舞台は教室(野外も含む)、あなたは舞台に立つプロの役者・魔術師であり、フアシリテーターであるべきだ」と。レベリ氏による「五つの振り返り事項」が思い起こされる。教員活動の支軸として常に心に留めるべきことであろう。

一、タイムリーで対象にあった導入をしているか。事象への疑問や興味に対し、

段階別にわかりやすく解いているか、そのための仕掛け作りや実践への練習が十分にできているか。

二、問題解決Ⅱ完了ではなく、その次なるものは何か、次のレベルへ繋ぐことを意識しているか。また宇宙的なスケールでものごとくを観て感じているか。三、大学で教えられた技法をそのまま教室で使うことはまずありえない事実を認めているか。

四、すべての芸術・保育活動が生活に深く繋がっていること(逆)に生活が芸術・保育活動に繋がっていること(正)の実例が今日はいくつあげられるか。

五、子どもの生活の中の事件(出来事)や発見を拾っているか。

以上、実践記録と考察を、日本の幼児教育や芸術教育に携わる方々、教職員方への一つの提案とさせていただけたら幸いである。

## 註

- (1) 若本澄男「図画工作科における現実的疑問・課題の検討(上)」『広島大学教育実践研究指導センター紀要』第5号(一九九三年)
- (2) 福田啓子「小学校生活科の意義と課題―幼稚園教育との関係―」『東京家政大学研究紀要』第36集(一)(一九九六年)
- (3) Vivian Yee, *Montessori Schools Surge in Popularity Among New Generation of Jewish Parents* (February 21, 2014 NY Times)
- (4) Tony Wagner, *Creating Innovators: Making of Young People Who Will Change the World* (2012)
- (5) 公益財団法人 才能開発教育研究財団 日本モンテッソーリ教育総合研究所サイト、モンテッソーリ教育について about Montessori <http://sainou.or.jp/montessori/about-montessori/about.php> (二〇一七年 四月参照)
- (6) Maria Montessori, *The Absorbent Mind* (1949)
- (7) Maria Montessori, *The Montessori Method*, Translated by Anne E. George (2006)
- (8) 松浦公紀『モンテッソーリ教育が見守る子どもの学び』(学習研究社二〇〇四年)

八〇頁

## 参考文献

- Rachel Carson, *The Sense of Wonder* (1956)  
Mona Brookes, *Drawing with Children* (1996)  
Jack Hobbs & Richard Salome, *The Visual Experience* (1991)  
Paula Polk Lillard, *Montessori Modern Approach* (1975)  
Maja Piramic, *Teach me to Do it Myself – Montessori Activities for You and Your Child* (2004)  
Lois Hetland, Ellen Winner, *Studio Thinking – The Real Benefits of Visual Arts Education* (Teachers College, Columbia University NY & London 2013)

写真 メトロポリタンモンテッソーリスクールでの撮影  
翻訳 自身によるもの